

陰嚢内に発生した Epidermoid cyst の2例

大阪市立大学医学部泌尿器科学教室 (主任: 岸本武利教授)

玉田 聡*, 和田 誠次, 吉村 力勇

山本 啓介, 岸本 武利

INTRASCROTAL EPIDERMOID CYST: REPORT OF TWO CASES

Satoshi TAMADA, Seiji WADA, Rikio YOSHIMURA,

Keisuke YAMAMOTO and Taketoshi KISHIMOTO

From the Department of Urology, Osaka City University Medical School

A 41-year-old man and a 47-year-old man presented with an intrascrotal mass. The routine studies and ultrasonography showed that the mass was not associated with the testis, epididymis or spermatic cord, but the magnetic resonance imaging was the most useful for making a preoperative diagnosis. Both patients received transscrotal resection of the mass, the histopathological diagnosis of which was epidermoid cyst. A total of 24 cases of epidermoid cyst have been reported in the Japanese literature.

(Acta Urol. Jpn. 45: 285-288, 1999)

Key words: Epidermoid cyst, Scrotum

緒 言

陰嚢内に発生する腫瘍のほとんどが、精巣、精巣上体、精索に由来する腫瘍であり、これらとは関係なく陰嚢内に発生するのは稀である。今回、われわれは陰嚢内に発生した epidermoid cyst の2例を経験したので若干の文献的考察を加えて報告する。

症 例 1

患者: 41歳, 男性

主訴: 右陰嚢内有痛性腫瘍

既往歴・家族歴: 特記すべきことなし

現病歴: 1992年頃より右陰嚢の腫大を認めていたが放置していた。1997年4月3日より発熱がみられ、また4月7日より右陰嚢に痛みを感じたため、4月8日当科を受診し、精査加療目的にて入院となった。

入院時現症: 体格、栄養ともに中等度。体温37.8°C。右陰嚢は小児頭大に腫大しており、左右の精巣は触診にて同定困難であった。陰嚢皮膚には発赤を認め、圧痛があった。透光性は認めなかった。

入院時検査所見: 血算、血液生化学、尿所見に特に異常認めず。精巣腫瘍マーカー (AFP, β -HCG, CEA 等) は正常範囲内であった。

X線検査: 胸腹部単純撮影では異常を認めず、またIVPにおいても左右腎、尿路に異常は認められなかった。

超音波所見: 腫瘍の内部エコーはやや不均一で精巣との間に連続性は認められなかった。

MRI: T1 強調画像では筋層と同等度の intensity である中等度の intensity を呈し、T2 強調画像では high intensity を呈する腫瘍を陰嚢内に認め、精巣との間に連続性は認められなかった。Gd-DTPA による造影 MRI では腫瘍は enhance されなかった (Fig. 1)。

以上より感染を伴った陰嚢内嚢腫、特に epidermoid cyst を疑い、4月14日、腰椎麻酔下にて陰嚢内嚢腫摘出術を施行した。

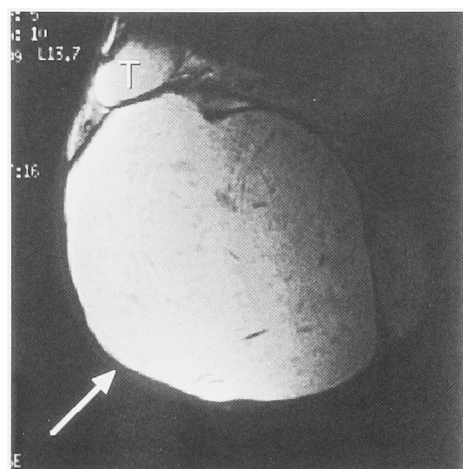
手術所見: まず、患者を載石位とし陰嚢皮膚の正中、嚢腫直上に約15cmの皮膚切開を加えた。剝離を進める際、嚢腫壁を一部穿孔したため灰白色泥状の内容物が流出し、吸引をしつつ嚢腫壁と陰嚢皮膚を鈍的に剝離し嚢腫を完全に摘出した。嚢腫は精巣、精巣上体および精索とはまったく関係なく陰嚢内に発生したものであった。余剰な皮膚は一部切除、形成し、ドレーンを挿入して手術を終了した。嚢腫は15×10×10cmであった。病理組織学的所見では、嚢胞内壁は正常表皮に類似した数層の重層扁平上皮におおわれており内容物は灰白色泥状の角化物で占められ、毛髪などの皮膚付属器は認めなかったため epidermoid cyst と診断した (Fig. 3)。

症 例 2

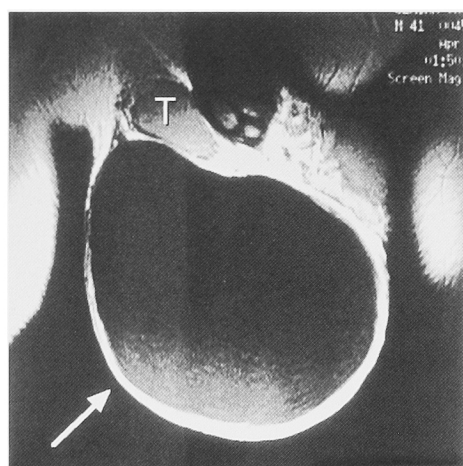
患者: 47歳, 男性

主訴: 右陰嚢内無痛性腫瘍

* 現: 和泉市立病院泌尿器科



(a)



(b)

Fig. 1. (a) T2-weighted MR image shows a high-signal-intensity mass (arrow), (b) and the same lesion is not enhanced (arrow). The mass is clearly separated from the testis (T=testis).

既往歴: IgA 腎症

家族歴: 特記すべきことなし

現病歴: 20年前より右陰嚢内に腫瘤を自覚していたが放置していた。最近、徐々に腫瘤が大きくなってきたため当科受診した。

入院時現症: 体格、栄養ともに中等度。発熱なし。右陰嚢内に 4 cm 大の表面平滑で可動性のある腫瘤を触知した。透光性はなく、精巣は両側とも正常に触知できた。陰嚢皮膚には発赤を認めたが圧痛はなかった。

入院時検査所見: 血算、血液生化学、尿所見に特に異常認めず。精巣腫瘍マーカー (AFP, β -HCG, CEA 等) は正常範囲内であった。

X線検査: 胸腹部単純撮影, IVP では異常は認められなかった。

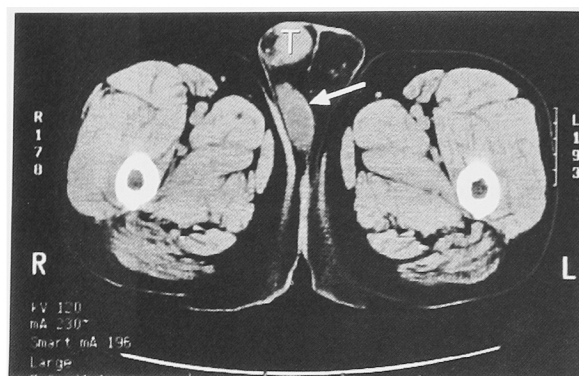
超音波検査: 腫瘤の表面は平滑, 内部エコーはやや不均一で, color doppler では腫瘤内部の血流は認められなかった。腫瘤と精巣との間に連続性は認められ

なかった。

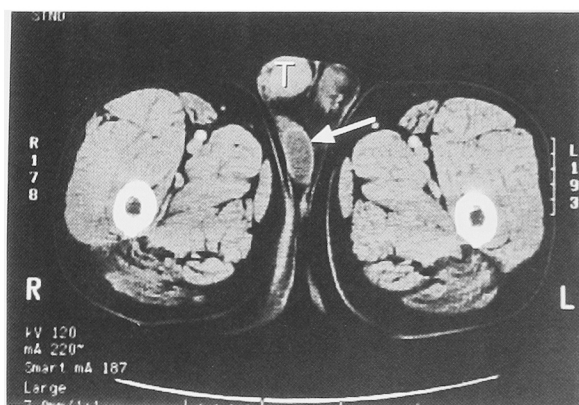
CT: 右陰嚢内に精巣とは独立した腫瘤を認め, 大きさは 4.3×2.8 cm, 内部 density は均一で CT 値は 10 であった。Enhance はほとんど受けなかった (Fig. 2)。

以上より陰嚢内に発生した epidermoid cyst を疑い, 11月13日, 腰椎麻酔下にて陰嚢内嚢腫摘除術を施行した

手術所見: 仰臥位にて陰嚢皮膚の嚢腫直上に約 5



(a)



(b)

Fig. 2. (a) Plain CT shows a homogeneous mass in the right scrotum, (b) and the same lesion is not enhanced.

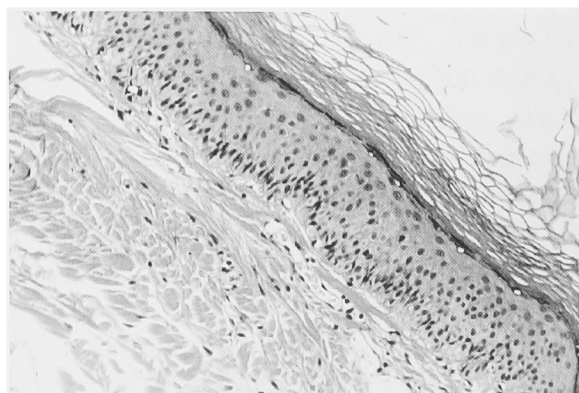


Fig. 3. A microscopic finding of the mass shows a cyst filled with keratin and lined with squamous epithelium (case 1).

cm の皮膚切開を加えた。その直下に嚢腫を認め、嚢腫と陰囊皮膚とを鈍的に剝離していった。一部、陰囊皮膚との癒着が認められたため鋭的に陰囊皮膚も同時に切除した。嚢腫と精巣、精巣上体との間に交通性はなかった。嚢腫上極にあたる部分で索状物となり鼠径部に伸展していたため、さらに皮膚切開を上方に加え、索状物の終端と思われたところで結紮、切離した。嚢腫は9×5×5 cm であった。病理組織学的所見では、嚢腫内壁は重層扁平上皮に覆われ、内容物は灰白色泥状の角化物で占められており、毛髪、皮脂腺などの皮膚付属器は認めなかった。以上の所見から epidermoid cyst と診断した。

考 察

泌尿器科領域における epidermoid cyst は比較的稀である。それはおもに精巣に発生し、伊藤ら¹⁾によると90例が報告されている。これに比べ、陰囊皮下に発生する epidermoid cyst は稀であり、本邦では原田ら²⁾の集計をもとにすると自験例の2例を含めて24例が報告されているにすぎない³⁻⁹⁾

Epidermoid cyst の皮膚科学的分類による位置づけは、これまで様々な説が唱えられてきた。本邦では古くから嚢腫内腔に粥状物のつまっている嚢腫の臨床診断名として粉瘤が広く用いられているが epidermoid cyst と粉瘤は皮膚科学的には同義語ではない。幸田¹⁰⁾によると粉瘤は病理組織学的には表皮嚢腫、外毛根鞘性嚢腫さらに脂腺嚢腫の3つの嚢腫を包括した臨床診断名だと述べている。そして外毛根鞘性嚢腫、脂腺嚢腫の嚢腫壁の病理組織所見は顆粒層を持たず、さらに脂腺嚢腫は皮脂腺を持つが、表皮嚢腫の嚢腫壁の構造は表皮と同じで顆粒層を持つため、これらは区別されると述べている。これまでの epidermoid cyst に関する症例報告ではこれに対する訳語が類表皮嚢腫、表皮嚢腫と混乱しているが泌尿器科用語集¹¹⁾では類表皮腫とされており、今後はこれで統一すべきだと考える。なお、dermoid cyst は内容物に毛包、付属器も混じる嚢腫であり epidermoid cyst と同一の疾患ではない。

その発生原因に関しては teratoma の亜型とする説、外傷による表皮の埋没によるとする説、陰囊縫線の癒合不全による先天性埋没によるとする説、エックリン汗腺の閉塞あるいは破壊によるとする説、先天性の表皮の迷入によるとする説などがあり、未だ統一した見解は得られていない^{12,13)}

本邦において陰囊内 epidermoid cyst として報告されている24症例の集計では、平均年齢は44歳で、発生部位は左が11例、右が9例、中央が4例であった。平均重量は400 g であった。診断については、本症は稀なため術前診断は困難であり、術前に診断しえた症例

は少ない。しかし、本邦報告例から見る本症の特徴は、嚢腫の発育が緩徐で経過が長いこと、触診所見として表面平滑で弾性は軟らかく圧痛を認めず陰囊水腫を思わせるが、陰囊内容とは区別可能な嚢腫であることであり、これらの特徴を満たすような陰囊内腫瘍については本症を考慮すべきである。

画像上の特徴としては、超音波検査では精巣と同一輝度か、やや hypoechoic で内部エコー均一な腫瘍としてとらえられるが、充実性腫瘍か嚢腫かの診断をくだすのは難しい。Epidermoid cyst は MRI では T1 強調画像では中等度の intensity, T2 強調画像では high intensity を呈し、精巣も同様の intensity を呈するが、造影剤により enhance されないのが特徴であり¹⁴⁾、この点から自験例では、術前に嚢腫であると診断された。本症において MRI は診断上非常に有用であると考えられた。なお、CT では精巣よりやや low density を呈し、造影剤により enhance されないのが特徴である。症例2のように触診にて明らかに腫瘍が精巣と独立していると判断できる症例に対しては CT にても嚢腫と診断することが可能であるが、症例1のように巨大な腫瘍である場合はやはり MRI のほうが有用であると考えられる。

鑑別診断として、陰囊水腫、精巣腫瘍、精巣上体炎、精巣上体嚢胞、精液瘤などがあげられるが、注意しなければならない疾患として感染を伴った陰囊水腫がある。理学的所見は大きな epidermoid cyst になると感染を伴った陰囊水腫と似てくるが、MRI により鑑別可能となる。超音波検査では、感染を伴った陰囊水腫も内部エコーが不均一になり充実性腫瘍との鑑別が難しくなる¹⁵⁾。しかし、MRI において感染を伴った陰囊水腫は T1 強調画像で精巣より low intensity に写り、また内部も heterogeneous であり¹⁶⁾、epidermoid cyst とは異なる所見を呈する。

治療法は嚢腫摘出であるが嚢腫壁を残すと再発するため完全に取り去ることが大切である。一般に予後は良好であるが、きわめて稀であるが悪性化についても報告されているため¹⁷⁾、注意を要する。

結 語

1. 陰囊内に発生した epidermoid cyst の2例を経験したので報告した。
2. Epidermoid cyst の診断には MRI が非常に有用と考えられた。

本論文の要旨は、第162回日本泌尿器科学会関西地方会において報告した。

文 献

- 1) 伊藤哲也, 加藤禎一, 山本啓介, ほか: 精巣類表

- 皮嚢胞—精巣を保存しえた1例— 泌尿紀要 **38** : 1187-1190, 1992
- 2) 原田昌幸, 日原 勲, 徳田直子, ほか : 陰嚢内類表皮嚢胞の1例. 泌尿器外科 **7** : 967-970, 1994
 - 3) 國見 宏, 藤井善隆, 村石信男, ほか : 陰嚢内に発生した表皮嚢腫の1例. 西日泌尿 **54** : 1933-1936, 1992
 - 4) Musa MF, Inui M, Kuwata Y, et al. : Epidermoid cyst of the scrotum: a report of two cases. Nishinohon J Urol **57** : 1050-1053, 1995
 - 5) 川村繁美, 大森 聡, 徳永英夫, ほか : 陰嚢内に発生した表皮嚢腫の1例. 泌尿紀要 **41** : 557-559, 1995
 - 6) 水尾敏之, 大矢和宏, 鈴木理仁, ほか : 陰嚢内腫瘍状に発育した粉瘤の1例. 西日泌尿 **58** : 841-842, 1996
 - 7) Kawai N, Sakagami H, Awata S, et al. : Epidermoid cyst of the scrotum: a case report. Acta Urol Jpn **42** : 609-611, 1996
 - 8) 妹尾博行, 小野 豊, 坂上和弘, ほか : 陰嚢内腫瘍と鑑別困難であった表皮嚢腫. 臨泌 **51** : 410-412, 1997
 - 9) 大岡均至, 今井敏夫, 岡田 弘 : 陰嚢内腫瘤として発症した表皮嚢腫の1例. 泌尿紀要 **43** : 398, 1997
 - 10) 幸田 弘 : 皮膚良性腫瘍—嚢腫について—. 日皮会誌 **98** : 1324-1326, 1988
 - 11) 日本泌尿器科学会編 : 泌尿器科用語集. 第2版, pp. 34, 246, 金原出版株式会社, 東京, 1996
 - 12) 樋口 潔, 河辺洋爾 : 外陰部懸垂性巨大表皮嚢腫 (Epidermoidzyste) の1例. 秋田県医師会誌 **14** : 39-41, 1962
 - 13) 鈴木 正, 池田重雄 : 表皮嚢腫. 皮病診療 **5** : 909-912, 1983
 - 14) Koenigsberg AR, Kelsey D and Friedman CA : Case report: ultrasound and MRI findings in a scrotal epidermoid cyst. Clin Radiol **50** : 576-578, 1995
 - 15) 古寺研一, 久 直史, 佐藤通洋, ほか : 陰嚢内疾患の超音波断層像. 臨放線 **27** : 85-89, 1982
 - 16) Rholl SK, Lee TKJ, Ling D, et al. : MR imaging of the scrotum with a high-resolution surface coil. Radiology **163** : 99-103, 1987
 - 17) Miller MJ : Squamous cell carcinoma arising in an epidermal cyst. Arch Dermatol **117** : 683, 1981
- (Received on October 9, 1998)
(Accepted on December 28, 1998)